研究発表

認識的外在主義と推論
—〈推論がアプリオリに正当化されること〉という観点から

小倉 翔（本学社会学研究科博士後期課程）

Laurence BonJour は「アプリオリなもの」の存在に賛成する主要議論として「アプリオリな正当化は認識論的に不可欠である」という趣旨のものを二種類提出している。このうちの一つは「アプリオリな正当化は〈(i) 経験から（ii）経験を越え出るような結論へ推論をすること（making inference)〉にとって不可欠である」という議論（第一議論）であり、もう一つはこれを一般化して「アプリオリな正当化は推論をすることにとって不可欠である」ということを議論するもの（第二議論）である。

こうした議論は最初に提出されて以降、Albert Casullo、 Gilbert Harman、 James R. Beebe、Joshua C. Thurow らによって扱われてきたが、いずれもオリジナル議論に対して批判的であって何らかの反論を展開している。このうち、Casullo は特にオリジナルの BonJour の第一議論を「一般性議論（The Generality Argument)」と呼んだ。

本発表は「一般性議論は認識的内在主義に賛成する者でなければ容認しないのではないか」という趣旨の反論を検討するものである。これは次のようなアプリオリな正当化構想についての二つの区別に関係して提起されるタイプの反論である。

（NAP）S は p を信じること／推論をすることを正当化される iff
S は p を信じること／推論をすることを経験へのどのような訴えにも依存せずに正当化される。

（PAP）S は p を信じること／推論をすることを正当化される iff
S は p を信じること／推論をすることを理性的洞察（rational insight）／理解（understanding）のみによって正当化される。

このうち一般性議論は〈PAP 意味でのアプリオリな正当化〉を〈推論をすること〉にとって不可欠であると結論せんものとして理解されるが、〈NAP 意味でのアプリオリな正当化〉が理論的には可能であって、それが〈推論をすることについての外在主義〉なのである。こうした種類のアプリオリな正当化の可能性が残されるから、一般性議論は切り崩されると言うのである。

このタイプの反論を検討するに際してはもっともらしい仕方では二種類の外在主義を想定することが可能である、すなわち、一つは、〈推論をすること〉のうちのいくつかはたんに「その推論が事実上信頼可能ないし妥当である」という事実のおかげで正当化される、という見方であり、もう一つは、〈推論をすること〉のうちのいくつかはどのような源泉にもよらずに正当化される、という見方である（後者は特に Harman らによって提出され得る)。

本発表では主としてこの二種類の外在主義を検討することになる。こうした検討を通じて結論されるのは、「標記の外在主義的理論は、論理的に可能な理論ではあるけれども、「どのようにして推論をすることを（NAP 意味で）アプリオリに正当化し得るのか」についてのもっともらしい説明ではない。し

かし PAP は他の唯一のもっともらしいオルタナティヴな説明であり、それゆえ一般性議論は〈PAP 意味でのアプリオリな正当化〉の存在を信じることを支持する」ということである。